

一二言、二三言、世迷い言(十三)

宗内 敦

たかがスポーツ、されどスポーツ③大
和男の子、稀勢の里！北の湖二世。

たかがスポーツのことなれど、日本古
来伝統の大相撲のこととなれば話は別だ。
大関稀勢の里に期待のあまり、昨年9/23
に、『大和男の子』を期待する」と題
して、苦言を呈した。その稀勢の里、今
場所は見事に変身。おこがましくも私が
期待したように、立合前の気負い、姑息
な張り手や引き技などすっぱり消えて、
愚直なまでに前へ前へと直進する正攻法、

迷うところがない。ときに突き・押し・

引きがあっても、それは相手の取り口に
合わせてのもので、以前のようにへっぴ
り腰ではなく、威力は倍加した。仕切り
前からの態度も悠然とし、いまや、まさ
に「大和男の子」にふさわしい。それか
あらぬか、日馬富士、白鳳の二横綱を堂
々と打ち破って、はや「横綱相撲」であ
る。14日目までにすでに2敗しているが、
「弱いから負けたのだ」と言い訳など一
切しないところがまた清々しい。因みに、
稀勢の里に敗れた白鵬は「下手投げで決
まった」と思い、力を抜いた。油断だっ

た」と見苦しい。ここまで来たら、横綱
取りに一喜一憂することはない。心技体
整った今、最高位はすぐあとからついて
くる。今は、見るところまさに「北の湖
二世」の感があるが、それは単なるステ
ップに過ぎない。ここでもまた、おこが
ましくも私は彼に期待し、独自独風の
大横綱を夢見ている。

そこで、稀勢の里には、ちよっぴりは
やいが、横綱昇進を決めたあとのコメン
トを、いまからしつかり準備して、これ
こそまさしく「大和男の子」と、私たち
を感動させてほしい。スポーツ選手・関
係者達の、勝ち鬨を上げた後のあの醜い
傲岸な発言はもう聞き飽きた。それは強
い不快感を超え、憤りすら感じさせる。
日馬富士は横綱昇進を前にして、「今後
も皆さんに、感動や勇氣や希望を与える
相撲を取っていきたい」と言い放ったが、
同様内容の発言は、昨年のロンドンオリ
ンピック後には、体操の内村航平選手そ
のほかから、嫌と言うほど聞かされた。
最近では、プロ野球「楽天」チームを日

本一の栄冠に導いた星野監督が「震災で苦勞なさっている皆さんを、日本一になって癒やしてあげたかった」と。「星野、お前もか」の思いであった。

勝てば官軍といった傲慢さを培う諸々の競技とは異なり、古式ゆかしい日本伝統文化の大相撲を向後支えていく稀勢の里だと思えばこそ、日本の美質、あえて言えば、日本人の奥ゆかしさ、これを改めて感じさせてくれる「大和男の子」であってほしい。
(13・11・24)

大物、遠藤。負けっぷりやよし！

大相撲12日目。期待の遠藤が大関琴奨菊にあっさり、簡単、美事に負けた。が、その、負けっぷりやよし！ 真っ向勝負で負ければ、彼我の差が歴然と分かるからだ。どうすれば勝てるかは、遠藤の資質を見れば、遠からず答えが出るはず。かつて、貴乃花がそうだった。負けてよし、遠藤。稀勢の里と並んで、綱を張る日が待ち遠しい！
(14・1・24)

NHKの体質を垣間見た―「クローズアップ現代」東大紛争45年目の真実、教授たちの告白録―

大変興味深い「告白録」だった。昨今、政治（権力）主導で安易に大学改革が行われてきているやに思われるが、そうした「大学のあり方」と「そうした大学で学ぶことの意義」などは、あまり議論されていない。この事態は、実はかつての大学紛争時において大学当局者や学生たちが直面した事態よりも、一層深刻な問題である。その意味で、「国家秘密法案」の制定など国（政府）が一層権力化する危惧と過程を感じさせるこの時期に、此度の「告白録」は、改めて大学教育とは何かを根本的に考えさせるまさに天恵の資料とも言うべきまことに貴重なものだった。

NHKはこの資料に基づき関係諸氏に要所・要点を語らせ、大変興味深く番組を展開させていった。が、スタジオのメ

インゲスト（麗澤大学 松本健一氏）に資料のもつ現代的意義を語らせる最終場面になって、まさに「NHKのあり方」を露呈した感があった。番組がまだ結論に到達する前に、キャスターが理由を述べることもしないまま、突然、発言中のゲストに向かって頭を下げ「ありがとうございます」と番組を終了させてしまったのだ。その後、天気予報や次番組紹介などの恒例の手続きに入るまでの間、番組とは全く関係のない、妙な児童画風の絵画をながして格好をつけたが、それはゲストがそれまでのコメントから結論的に資料の意味をまとめて言及することが可能な時間であった。

ゲストの語ってきた論点が、NHKの求めるものと相容れない内容であったから、また、その論点や内容から、明らかにNHKの求めるものと乖離する結論に向かうと予想されたから、とは思いたくない。しかし、この唐突な終了の仕方には、明らかに、NHKのもつ思想的背景と体質の偏りが垣間見えたとやわざるを

得ない。多少飛躍するが、昨今騒ぎを起こしたNHK委員長の「従軍慰安婦問題」についての発言内容などを勘案すると、なにかNHKには、真の人間性を追求する姿勢に欠け、どこか思想的に偏つたものと親近する体質があるように思えなければならない。

貴重な「教授たちの告白録」を見出した功績は認めねばなるまい。しかし、ここで筆者が挙げた二つの事案を自らの「告白録」として、NHKは自ら、「NHKとはいかにあるべきか」を真摯に問い直すべきである。(14・2・1)

浅田真央を讃える

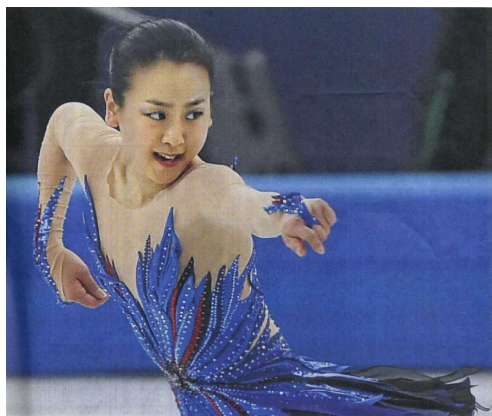
乾坤一擲、阿修羅の舞―うるわしき世

界一のアスリート

ソチオリンピック、女子フィギュアスケートの浅田真央選手が、健闘むなしく華々しく散って果てた。前半SPで信じられないミスを連発して上位選手との間に絶望的な得点差があるなかで、それをも

のともせず、後半フリー演技で乾坤一擲の歴史に残る舞を演じて観る者すべての心をその奥底から揺さぶったが、全体第6位に敗れ去った。しかし、その演技たる

浅田真央(2・21日経新聞)



の奥義を究めんとしていた身には、演技を終えた瞬間の達成感と満足感はいかばかりか。彼女は胸底からこみ上げる万感の思いを必死にこらえ、押し寄せる歓喜と号泣感を懸命に押さえて、しばし涙し、一瞬翻つて微笑んだ。前回のバンクーバーオリンピックから彼女が歩んできた苦の道を知らずとも、誰もが皆、共感し、共に泣き、共に快哉を叫んだであろう感動のシーンだった。

思えば浅田真央は、オリンピックをよすがに、フィギュアスケート道の真髄を究めんとしていた。勝敗を超え、相手は己の心のみと決めて、トリプルアクセルを回避して連続3回転ジャンプを選択するなどの、勝つため、得点を上げるための姑息な手段をとらず、トリプルアクセルを極みにすべてのフィギュア技術を取り入れるプログラムをもって、ひたすら心技体を磨いてきた。故にこそ、フリー演技を成功裡に終えた時、悟りを得た菩薩のごとき心境に達したに違いない。その後の、インタビューに応じるときの、

すでに勝者とか敗者の次元を超えたあの穏やかな微笑みを見れば、それは瞭然。そうした、ある意味、達観の境地にいる彼女に向かって、これがマスコミというものか、NHKのインタビュアーがぶっつけにも、「SP上位者達のフリーの演技をどのような気持ちで見ているか」と問わずもがなの質問をぶつけたものである。たしかに、SPで大失敗したとは言え、フリーとの合計点は200点に近く、グランプリ大会など並の競技会では容易には出せない高得点ではあった。もし、後に演技する選手達が浅田真央の得点を意識して萎縮したら、彼女が金メダルを含むメダル圏内に浮上することもあり得ないことではない。そうしたケースはこれまで幾度も見られている。かくして筆者もそれを期待し、テレビ観戦中、とりわけユリア・リブニツカヤ、カロリーナ・コストナー、アデリナ・ソトニコワ、キム・ヨナなどの有力選手の演技中には、恥ずかしながら「転べ、転べ」と喚元近くで声を上げ続けていた。つい先日、長野オ

リンピックでは負傷して補欠に回り、中間の大活躍を悔し涙の中で眺めていたジャンプ競技の葛西紀明選手(41)が銀メダルを獲得して一躍時の人となったが、無情なマスコミ人はそこでも同じような質問を浴びせていた。「長野オリンピックの時、大活躍の仲間達をどのような思いで見ているか」。それに対して葛西選手は「野球で代打者を出されたら、下ろされた選手の誰も代打者のヒットを望みはしない」といった意味内容で巧みにかわし、これはこれで良しである。けれども、浅田真央はためらうことなく、次のように述べた。「がんばれ、がんばれ」と応援していました」。

勝負の垣根を超え、フィギュアスケートの真髄に迫ることを無上の目標とし、争う仲間を共に道を究める同志と見立てる心境にしなければ、とても言える言葉ではない。嗚呼、彼女はすでに、アスリートの世界を超え、斯道の極美を探究する芸術家の世界に到達した、まさに、うるわしき世界一のアスリートである。

人権意識の欠如とパワハラ・権力主義の横行



一見、妙齢の華麗な女性達。だが見方を変えれば、今にもむき出しになりそうな太腿が連想され、見世物としか言いよ

うのない無残なスチュワードス達の艶姿である。テレビを見ていて唾然としたこのニュース、「産経新聞」を借りて紹介すると：

航空会社スカイマーク（東京）が新機種就航に伴って導入する女性客室乗務員（CA）の膝上約15センチのミニスカート（他社幹部）などの批判が相次ぐ中、5月末の就航に合わせた「ミニスカCA」は「離陸」できるのか…。

(14・3・22)

同社の西久保慎一社長は批判が出ている制服のデザインについて、「若々しさや元気さを出したかった。無理に着せることはなく、希望するCAを選んでい」と話し、ご満悦の様子。しかし、もし、社の意向やあり方に抗してこの制服の着用を拒む者が出た場合、果たして彼女は無事でいられるだろうか。その後、それ

こそ社長周辺からのセクハラ・パワハラなどを受け、会社に長くどまらなことはできなくなるのではないか…。組織上層部の偏見と専横。私の周囲にもこうした時代の一つの事件が起き、それを取り上げたのが前回の「いじめ、パワハラ化する大学中枢」であった。

それにしても、恐ろしいほど、人権意識の欠如とそれに基づくパワハラ・権力主義の横行する時代になった。過日、榊井勝人NHK会長がNHKの理事全員に「白紙辞表」を提出させた「白紙辞表強要」事件はその象徴であろう。この人は、日本軍の慰安婦関連妄言で波紋を起こした舌の根も乾かぬうちにこたびの行動を起こし、国会で問われて最初は「人事問題については回答しない」と突っぱねていたが、さらなる追及には「一般社会ではよくあること」と昂然と言いつつ、私たちは普通の人間の感覚とは実に異なる。

長きにわたって続いた腐敗・自民党支配を終わらせた国民力。しかし、後を継がせてもらった民主党の学芸会的政治劇

のおかげで消去法的に自民党が復活。過去の経験から今度ばかりはいろいろ反省と内省のある政府・与党を作るかに思えたが、「秘密保護法案」や「憲法改正」そのほか、むしろ（力を握って）以前にも増して勝手気ままな独走が見え始めている。

力を持った者や組織が、勝てば官軍のおごった意識で勝手気ままに権力化し、専横化するの世の常、人の常ではあるが、それにしても、昨今、上でも下でも、あちらでもこちらでも、権力主義の横行が目に見える。随所での、国民力の復活。私たち一人一人が、国家未来のために、それが大であれ小であれ、悪や権力主義を許さぬ気概を持たねばならない時代だと言えよう。

(14・3・27)

人か、組織か。

過日、静岡地裁が袴田事件における警察の恐るべき冤罪作りを疑い、死刑囚の袴田巖氏を釈放した。つい先年にも、足

利事件が警察の冤罪作りであったことが判明して、同じく死刑囚とされていた足利和氏が釈放されて大騒ぎしたばかりである。むかし家裁調査官をしていた頃、警察の取り調べを受けた少年達から、幾度も聞かされた。「取り調べを受けてみれば、誰にもすぐ分かるよ。警察が権力を笠に着た『公的ヤクザ』だということだ」。

警察という組織が人を作るのか、人が警察を作るのか。いずれにしろ、人を罪人として仕立て上げてその一生を葬り、なお平然とする恐るべき存在。それに慄然としながら、世人は自分たちがそうした人や存在を作り上げてきた一因を担ってきたことには気づいていない。見回せば、世の中には、明らかな犯罪行為にまでは至らなくても、人を傷つけ欺き、あるいは権利を侵害して、平然と人々に害を与える人と組織がごろごろと転がっている。そういう「小事」が、実は、人や組織をして悪への罪意識を奪い、また世の中全般に悪への免役性を育て、大事・

大悪を生み出す社会的な基となる。小事・小悪が蔓延するところには大悪が芽生え、それが正しく指弾されるころには大悪はけつして生じない。被害者を自らにまで追い込む「いじめ」社会を見ればよく分かる。「一言、三言、世迷い言」と称して、私が好きで、それら小事・小悪を取り上げ、糾弾を続けている所以である。

勿論、小事・小悪の向こう側には、小事・小善をもって世の中を暖かく支える人たちもたくさんいる。その人たちから受けた人情は宝物となり、悪意や悪事に向けて気持ちが高ぶるとき、潮を返すように現れ出て、世の中を信頼し、明日を信じる気持ちを取り戻させてくれる。そのときまた、善を称え、悪を糾弾する心が、再び、忘れまいぞと甦るのである。

① 拝啓、みずほ銀行殿(6)

さて、旅行から帰って数ヶ月後、みずほ銀行の暴力団融資事件が世間を騒がせ始めた。その問題がよい潮となり、鬱憤

やる方のなかったこの銀行とのやりとりを書いて本ブログ欄にアップした(「拝啓、ワンウェイ・みずほ銀行殿(1)~5」)。次いで取引停止について、まずは投資額の大きい投資信託の解約から始めることにして、その解約依頼を八王子支店に電話連絡したところ、なんとということ、此度はすぐに応じて、自宅まで手続きにやってくるという。が、翌日やってきた担当者(S)が差し出した解約申請書なる書類を見て驚いた。他の証券会社に口座振替すると伝えておいたのに、なんと売却申請の書類なのである。それを正すと、これまたなんと、当社の規定は他社への口座振替は認めていない、売却する以外には解約できない、と宣い、それはいかにもおかしい規約だと何度申し立てても、それは出来ないの一点張り。年寄り相手と見くびって言いくるめようとする様がありありと分かる態度である。あきれ果てて、「もう、よい。しかるべき所に通告する」と言って、その行員を家から叩き出した。翌日、問題解決を相

談する役所関係はどこかと思索している
と、その行員から電話が入った。「昨日
は、失礼しました。調べてみたら、他社
への口座振替が出来ることが分かりまし
た。早速手続きに伺います」。

こうして、一件落着とはなった。が、
この銀行のこれまでの対応、なんとも不
愉快、また何とも解せない。そこで、こ
の銀行のインターネット上の「お問い合
わせ」意見・苦情」サイトにこれまで
のいきさつを簡略化して報告し、「より
詳しくはネット上の「拝啓、ワンウェ
イ・みずほ銀行殿」をご覧ください、御社
のご意見を伺いたい」と添えてみた。数
日後、その本社からではなく、例の八王
子支店のS氏から電話が入った。「何か、
本社の方にお問い合わせをされたよう
ですが、どういう「用件」でしょうか？
…」

問い合わせたいことがあるようだった、
ということなので電話を差し上げたま
で」とのことだった。ここに至って、こ
れが、みずほ銀行の体質か、とすつかり
嫌気が差した。折も折、『瓊』25号に掲
載した「拝啓、みずほ銀行殿」を読んだ
友人の一人から「最近暴力団への融資が
暴露されていますが、そういう会社なの
ですね。論より証拠なのです」と感想
が寄せられた。数日後、私は実はささや
かながらこの銀行の株主の一人でありな
がら、預金通帳の解約はもちろん、隣家
の主が勤務していて長年取引のあったみ
ずほ銀行の子会社「みずほ証券」との取
引もすべて打ち切った。

② 拝啓、フランスベットホールディ ングス殿

株主と言えば、私はいくつもの会社の
株式を所有し、株主経験は40年をも越え
る。そして、悪女の深情けにも似て、一
旦株主になると余程のことがない限り、
その株式を手放さない。そのため、長い
間には、例えば「興人」、「三光汽船」、
「日本航空」といった倒産会社の株券を、
亡骸を納めるかの如く、銀行の小さな貸
金庫の中にしまい込む仕儀に至ることも
ある。私には、惚れ込んだ会社と資本主
義社会における運命を共有することを好
む妙な趣味があるらしい。しかし、こ
うして長くおしんできた会社の一つで
はあっても、こと「フランスベットホー
ルディングス」については、近々、みず
ほ銀行と同じく縁を切ることになるだ
ろ。なに故に？ まずは私が以前に書い
た一文をご覧ください。

「毎年、年賀状の誤配がいくつかあった
が、今年のそれは目に余った。わが家へ
投函された他家宛年賀状が数枚、他家に
誤配されたわが家の年賀状が、分かった
だけでも七通、あった。わが家に誤配さ
れてきた年賀状はそのまま郵便ポストへ
入れたが、他家へ誤配されたわが家のそ
れは、近所の二軒のお宅がわざわざ届け
てくれたから、判明したのだ。もし届け
てくれなかったら、放棄されてしまっ
たら、と思うだけでもぞっとする。…」

…『(二言、三言、世迷い言)』第6話
蔵野書房 所収)

葉書や封書などの郵便物が相手に届いていなかったという現象、決して珍しい話ではない。紛失原因の第一位はおそらく郵便局に起因する事故であろうが、受け取り先が受理した記録や記憶のないままそれを紛失してしまう事故やその他多様な原因が考えられ、書留便でもない限り、一旦「紛失事故」が起きたら、その郵便物を見いだすことはもちろん、紛失原因を突き止めることなど、至難の業である。この場合、郵便物の投函者は、何の損害賠償も受けることなく、それどころか、郵便物を投函していなかったのではないかといった理不尽極まる非難を、相手方や郵便局から暗黙裡に浴びせられることさえある。

(閑話休題)

「優待物」で引きつけ、株主の獲得や安定化を図る「株主優待」という制度がある。「フランススベットホールディング

ス」にもそれがあり、私は毎年、いくつかの選択肢の中から選んで優待物もらっていた。ところが今回、ずいぶん時が経っても物が来ない。思い立って担当係へ電話したところ、申し込みがなかったから、送ってないとの回答。そこで

「何かの事故で申込書が届かなかったのかも知れないが、当方は株主としての権利」があるから送って欲しい」とやんわり要求したが、その女性係は「申込書が届いていない限りそんなこと絶対に出来ない」の一点張りで、ついには「申込書が届かなかったなんて事故はかつて一度も無かった。優待品は送れない」と威丈高になって断言する。仕方ないので、試みに回答者を代わってもらったところ、室長なる男性が出てきた。が、これがまたさらに強情で、「本当に投函したかどうか、郵便局に調べてもらって申込書を探させる。その結果で回答する」と言うのである。

馬鹿馬鹿しくなって、そこで電話は打ち切った。昨今は、電話の録音は当たり

前のように行われ、今回は当方もその録音を残してみたが、聞き直してみると、何と何と！。今時、株主に対してこんな対応をするところがあるのだろうか、呆れるほかはない。

それが先日、忘れた頃に、この会社の総務室・広報係(梅本)から、郵便局(八王子西郵便局)からの郵便物未発見なる調査報告書を添えて、回答があった。「拝啓、平素は格別のお引き立てを賜り誠にありがとうございます。2月下旬に株主優待券を送付したが優待品が届かないとのご連絡を頂きました。お調べいたしました。宗内様の株主優待券は未着でございます。この事から、郵便局に調査を依頼したところ、その結果が届きましたので、別紙の通りご報告申し上げます。

このたびは宗内様のご意向に沿うことができず、誠に申し訳ございません。今後ともご支援賜れば幸いに存じます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。」

「あなたが申込書を投函した証拠はない。

だから、優待品は送れない。でも今後とも宜しく」と、人を使った趣旨明快なご回答。もうよい、もうよい。再び三度呆れるばかり。株主に対してさえかような態度・姿勢を持つ会社に、内実を知らなかったとは言え、福祉社会の福祉ベツト作りに貢献することもあろうかと期待して長くつきあつてきたのがいかにも無念。これですっぱり縁切りとしよう。

ああ、そうそう。ここで、思い出した。同じようなやりとりが、かつて一度だけ、アパレルメーカーの「レナウン」に関してもあったが、今となれば、それはなおさら懐かしい貴重な思い出である。

③ 拝啓、レナウン様

アパレルの名門企業「レナウン」の株主になってから、30有余年。しかし、株主になった直後から業績が落ちる一方、たちまち無配会社となり、今でもずっとそのままだ。しかし、株主優待として、傘下のアクアスキュータムの高級靴下が3足送られてきて、妻と娘の分も合わせ

ると合計9足。毎年、友人・教え子たちにくつかお裾分けして大変喜ばれた。その靴下がある年、妻の分だけやってこない。そこで私が妻に代わって優待係に電話したところ、美しい透き通った若い女性の声がよくどみなく返ってきた。「申し訳ありません。こちらの発送業務に遺漏があつたか、配送途中に事故があつたか、どちらかだと思えます。早速にお送り申し上げますので、よろしくお願い申し上げます」。

レナウンの業績の低下は著しく、やがて、株主優待もなくなつた。そして株価も徐々に徐々に下げ続け、今では何と投資額の百分の一。紙切れ同然である。けれどもなお、私は、あの優待係嬢の応対に心奪われたまま会社と繋がり、いつかレナウンのアパレル名門復活を夢見て、株を持ち続けている。滅多なことでは思ひ出さないが、この程、あの時の電話のやりとりを久方ぶりに思い起こすきっかけを与えてくれた「フランスベツト」さん、ありがとう。人間の温かみが行き

交つた体験は、誰にとつても、つらい人生を生きゆくための心の源。あの人が今、よい伴侶を得て、よい子に恵まれ、万一期かなお孫さんにもでも囲まれてはいはいかかと、ふと祈りたくなつた。

「たつた一人の行為が信頼のすべてを崩壊させることもあります。自らの行為の影響や責任の重さが昨日までと違うことをしっかりと自覚して頂きたい」(日経新聞14・4・4)。

これは、ある会社のトップが入社式で行つた訓示の一節である。それがなんと、誰であろう、傲岸・無責任とも思える言動をもつて各所で物議を醸してきた、かのNHK会長・榊井勝人氏のものだということから驚きである。万一ブラックユーモアか、あるいは自戒の末の心境かとも思つたが、その真意の程は到底推し量れない。しかし、けだし至言。その内容・大小を問わず、およそ職責を有する組織人のすべてに贈りたい言辭ではあつた。

(14・4・7)